

実践報告

少年非行と地域性

— 少年非行の現場から —

榮 隆 男

少年非行，特に初等，中等年齢，いわゆる小学生，中学生年齢のすべての非行の特徴は“地域性”にあるといえる。彼等の引き起こす非行行為はそのほとんどが”地元“で起きているのである。仮に彼等が，自らの居住域を越えた他地域で事を起こしたとしても，その非行の根は地域の人間関係を離れてはありえないのである。

高等学校年齢の少年に於いても，その傾向性は同様である。“地元”の先輩，後輩，そして同輩との関わりの中で非行の芽は生じ，芽生え，はびこり，エスカレートしていく。従って，少年非行の予防，又は対処に当たっては，地域の特性の理解，状況の把握が極めて重要である。

例えば，東京で言えば，山の手か下町か，山手線の内か外か，古い町か新興地か，23区内か旧郡市（多摩地区）か，はたまた京浜東北線の西か東か等々，そして，これらの組み合わせなどである。そして，町は生きているのである。地域性と言えども，時代の推移と共に変容していくものである。10年どころか5年もすれば，町の様子が一変する地域もあるのである。しかも，こうした時代の推移に伴う影響をもっとも受け易いのも少年達である。つまり，少年非行の把握には，地域性と同時に時代の推移に対する注意深い気配りが求められてくるのである。

地域性や時代の推移の把握と共に，少年非行と向かい合うときに最も重要なのは教育機関，即ち小，中学校との連携である。特に，少年の非行が顕在化してくる中学校との連携，協力なしには少年非行の把握，対処，解決はあり

得ないと言っても過言ではない。

保護司は“地の塩か、地回りか”

さて、私が保護司活動を行っている地域は、東京保護観察所管内の北保護区、北区の東王子分区である。さらに、私の居住地は W 町と言って、南は京浜東北線と都電荒川線、北は隅田川、西は石神井川、東はかつて大小の工場群があり、町全体が1丁目から4丁目まで、あたかも一つの村のように枠組がはっきりした町である。町内には1万人弱の住民が住むいわゆる下町である。町には、小学校が一つ、中学校が一つ、そして、公立の幼稚園と保育園、私立の幼稚園、保育園が、各々一つずつある。

下町と言っても、神田、上野、浅草のような江戸時代からの下町ではない。東京の多くの町がそうであるように、大正から昭和の初めにかけて形作られた新興の町である。町が形を成してからせいぜい100年ほどの歴史しかないのである。その最も分かりやすい例が小学校である。私の地元の小学校は一昨年、創立90周年の記念式典及び事業を行った。勿論、それ以前に、この町に人が住んでいなかった訳ではない。前述のように、1万人弱のこの町の元々の地の人は僅か6~7家族にすぎなかったのである。今は地主と呼ばれるこれらの家は、もともとは農業を生業としていた人々であった。その他の多くの人々は地方から上京してこの地に住み家族を成してきた方々である。

明治40年生まれ私の父親もまた、今から90年ほど前に、鹿児島島の離島、奄美大島からはるばる上京しこの町で仕事に就き、家庭を築いている。そして、私たち兄弟姉妹はここで生まれ育ちこの町の小学校を卒業し成人していった。現在、小中学校に通う生徒たちも、せいぜい4世代目か5世代目であり、この町で生まれ育った私の目から見ると“あの家の孫か”となり、曾祖父母は誰か、と言う事まで時には分かることがある。

私自身は生まれ育った地元で保護司を拝命して今年で25年目を迎える。
地元の小学校

を卒業し、大学へもこの町から通い、結婚して家を離れ、隣町に住むまでの26年間で此処で過ごしている。15年ほどして当地に戻り、両親と暮らし、

見送り、今も住み続けている。現在は、保護司の他に、地元小学校の同窓会の会長、小中学校の学校評議員、中学校サッカー部の外部指導員、そして、町内会の副会長を仰せつかっている。

私にとって中学校との関わりは、学校担当保護司という立場よりはむしろサッカー部の指導という側面からの方が大きいと言える。クラブ活動は生徒指導ということと密着しているので、部活担当教諭を通じて、部員のクラス担任、学年担任、さらには生活指導主任、そして、管理職である校長、副校長との絆が自然に生まれ強まっていく。運動部、それもサッカー部には、問題児が集まってくる傾向があり先生方との関わり方も密にならざるを得ない。なかでも保健室の養護教諭との関係は重要となってくる。保健室登校の言葉どうり、離脱空間としての保健室には、逸脱寸前の生徒達が立ち寄り、時に居座っているからである。勿論、養護の先生の人格、包容力に依るところが大きいのではあるが。

私がサッカー部の指導に携わるようになってから 15 年ほどになるが、部活の外部指導員制度も学校評議員制度も始まる以前のことであった。その時の学校長から、サッカー指導の出来る教員がいないなかで生徒達は区の大会を勝ち抜き、ブロック大会も突破して都大会に進んでいるので、是非とも指導してやってほしい、という依頼を受けたことが始まりであった。以来、徐々に中学校との関わりは深まっていた。

学校長は、私が大学時代にオリンピックを目指してサッカーをやっていたことや、その後、区内の少年サッカーから社会人までのサッカー指導に取り組み、区サッカー協会の組織作りとその責任者をつとめていること、他方、(財)日本サッカー協会の中で、フットサル連盟の理事長として、この競技の普及発展の任に当たっていたことを知っていたのである。このサッカー部の指導に携わったことが、保護司としてのその後の私の活動に大きな役割を与えてくれた。さらに、6 年前からは、地元の堀船小学校で 1 年生から 6 年生までの全学年に体育の授業でフットサルの指導を行っているので、町の子供たちはみな顔見知りでもある。また、5 年前からは小学校の付属幼稚園を、4 年前からは区立保育園、そして昨年からは私立保育園も加わって月に一回、サッカーの指導に当たっている。

ところで、保護司には二つの役割が課せられている。一つ目は、犯罪や非行を犯した対象者の社会復帰へ向けての更生の手助けである。もう一つは、犯罪や非行の予防と防止による社会の安全の確保の為の活動である。新約聖書のマタイの福音書 5 章の 13 から 16 にかけて“地の塩”の話が出てくる。イエスは、神を信じる者は、腐敗を防ぐ塩のように社会や人心の純化の模範であれ、と説いているのである。私が保護司になる以前の保護司の方々は、自らが保護司であることを公にすることを憚っていたという。理由は対象者の更生に配慮してということであった。しかし、四半世紀前ぐらいから、保護観察行政の方針の 180 度の転換が成され、保護司の存在を明らかにすることで地域の安全性を高めていこうとする路線が打ち出された。言うなれば、保護司に“地の塩”となることが求められたわけである。

では、翻って自分自身はどうであろうかと省みてみると、自らを“地の塩”とは到底思い得ない。町を行けば、子供たちから声をかけられるし、中学の問題児も必ず挨拶をしてくる。成人した若者からも“今日は、何々ですおぼえていますか”としばしば声をかけられる。“地の塩”どころか、敢えて言うなら“地回り”と言ったほうがふさわしいのではないか、と言う実感がするのである。こういった状況の中から出会い、対応というよりは、むしろ対決するように向かい合ったある少年と家族の例に触れてみたい。

Z 家と Y のこと

いつの時代にも、そしてどんな社会にも周囲から敬遠されたり、煙たがられたり、恐れられたり、輦蹙を買う人や家族はいるものであるが、Z 家族は、この町でまさにそうした存在であった。粗暴で暴力的な家族と後ろ指を指されたこの家族は、父方の祖父が解体業で成功し羽振りがよく、父親は建築外装業を営み、父親の兄弟もまた建築関係の現業に就いていた。一族の結束は固く、事あるときは一族で向かってくと恐れられていた。また、この町には、ヤクザ A 会一家の親分 M の家があり、Z 家はこの系列にあるとも言われていた。

家族は男子ばかり 6 人兄弟の 8 人家族であるである。今は 20 代半ばにな

っている長男は中学校では校内での喫煙から暴力沙汰を繰り返し、注意を受けると腹いせに消火器を噴射させたり、窓ガラスを割るなどの粗暴な行為で学校を困らせるなど、ついに学校側の指導を受け入れることのないままに中学校を出て行ってしまった。私ども地域の保護司の集まりの度に、この家族、とりわけ両親はどのような人物なのか話しには出るが、母親がかたくなで、小学校でも学校との折り合いがうまくいってなかった、と言うぐらいの情報しか得られなかった。

長男の卒業の後を追うように、次男が中学に上がってきた。口が重く、会話の取れなかった長男と異なって、よくしゃべる調子のよい男ではあったが、喧嘩早く、すぐに手を出し、弱いものいじめをするところは兄と共通していた。しかし兄と異なり明るく、話せば通じる賢さも持ち合わせていたので、先生方はうまく乗せて導いていった。3年の運動会ではリーダーも立派につとめ都立高校の普通科に進むことができた。このころになってようやく母親が学校に顔を出すようになってきた。そして、次男が卒業するのと入れ替えに、今度は三男が入学してきた。この三男は一番凶暴だという噂を背負って入学してきた。しかも、入学前から、サッカー部に入るらしいという情報が伝わってきていた。入部してきたらチャンスだと顧問の先生と話していたところ、噂のとおり彼は入部届を提出してきた。

会ってみれば、普段は口数の少ない、静かな男であった。小学校までは野球をやっていてサッカーは未経験であったが、このZ家の兄弟は皆、運動神経が抜群で、足が速かった。三男のYも素晴らしい瞬発力の持ち主で、短距離走は学年一であった。本人に希望のポジションを聞くと、フォワード、しかもセンターフォワードをやりたいとのことであった。目立ちたがり屋というか、格好のよさにこだわるのもこの兄弟の特徴でもあったので、すべて認めて、その代わり、練習にしっかりと取り組むことを約束させた。部活顧問の先生、担任の先生方とは緊密に連絡を取りながら見守っていくことにした。口数が少ない反面、手が出るのが早く、しばしば暴力沙汰を引き起こすところは、兄弟共通であったが、カッとなるのも早いが、収まりも早く、収まれば先生方の言う事には素直に従うわきまの良さも持っていた。彼が入部してからしばらくして、部員の父兄懇親会があり、母親が出席してきた。私は

大部分の時間を Y の母親との会話に割いた。サッカーという競技の特性について話し、我が儘や勝手は許されないということも告げた。すると彼女は、自分もバスケットボールを高校までやっていてキャプテンもつとめたので、団体競技のチームワークの大切さは分かっているつもりです、もし Y が言う事を聞かないようだったら、ぶん殴って下さってかまいませんのでよろしくをお願いします、とのことであった。

伝え聞いていた頑迷な母親ではなく、子を思う母に共通する優しさも、他人に対する思いやりも持った、むしろ、明るい母親像を見ることができたのである。しかも、注意することがあったら何時でも言ってください、と言って携帯の番号も伝えてくれた。1年生の時の Y は勉強には興味を示さないものの、サッカーには熱心に取り組み、それなりに上達もし、ゲームでも使えるようになっていった。2年生になったある日のこと、練習の前に皆の前で、2年生の中で一番強い者は誰か、とわざと問いかけてみた、ニヤニヤしながら誰も答えない。そこで私は、Y、お前だな、ところで強い者は自分より弱い者に手を出すな、それはいじめだ、いじめは卑怯な者のすることだ。本当に自分の強さを見せたいのなら試合で出してみろ、サッカーはルールのある喧嘩のようなものだ、そこで負けるんではない。と発破をかけた。

2年生になっても、力づくで同級生に対して威圧的に対そうとする彼の態度にそのような言い方で注意を促したのであった。父親を頂点に家庭内が力の論理で成り立っている日常は、学校の中にも当たり前のように持ち込まれていたからである。母親は子供が問題を起こすたびに学校にはやって来て、親としての事後の謝罪とかはきちんとしていた。しかし、彼らが引き起こす暴力行為の根源が構造的なものであることには思い至ってはいないのであった。2年生の夏の大会の後、3年生からキャプテンの引継ぎを行うミーティングが持たれた。2年生以下からは、普段は大人しいが、試合になると一切手を抜かずひたむきにプレーし、勿論練習も真面目に取り組む K が圧倒的な支持を得た。ところが、3年生のキャプテンがなんと Y を支持したのである。顧問の先生が K に意向を問うと、やりたくないとの返事が返ってきた。次に Y に問うと、やりたいとの返事が返ってきた。顧問は、では Y がやれ、とその場で即決した。

その後、顧問と私は Y を呼び、今後は学校の中は勿論のこと、学校の外でも事件を起こせばサッカー部そのものの活動が出来なくなるが覚悟は出来るか、と問いかけると、やりますとの返事が返ってきた。顧問教諭と私は、これとにかく来年の夏までの 1 年間、彼を支えるものが出来たとの意見で一致した。Y は、その後も威圧的な態度はなかなか変えられなかったものの彼なりに責任は全うして 3 年の夏まで自分自身を維持することが出来た。

私たちが心配したのは秋になって、同級生が受験に向かいだした時にどう自分を維持するのかということであった。幸いなことに、彼には同級生の勉強もスポーツもできる彼女がいた。しかもその中は、先生方が心配するほどに進んでいるように見受けられもしていた。だが木枯らしが吹き始めるころに、彼女のほうから離れていき、中は切れた担任のベテラン教員から聞かされた。相変わらず勉強はせず進路も定まらないままに年が開け、高校へは進まないと言った Y が、周囲が推薦入学が決まったりするのを見るうちに、親の進めもあり、3 月に入って土壇場で進学を願い、何とか北区内の都立定時制に入学することができた。3 年生全体の最後から 2 番目の進路決定者であった。

“やはり来たか”

進学はしたものの、彼の周りには中学時代からの繋がり of 北区内の非行系の少年達とのネットワークは依然としてあり、特にこの学年はそうした傾向の少年達が多かったこともあり、警察の少年課は、彼等の動向を注意深く把握していた。むしろ何かあれば捕縛する姿勢でいたからである。すでに彼らが 20 人近くで結成していた非行系グループは解散させられていたのである。にもかかわらず彼らは集まっては食事を重ねていたりしていた。いつか事を起こしていずれはあなたのところへ来るよ、と中学の先生方からは冗談まじりに言われていたりしていた。そして、やはりその日が来てしまったのである。

Y が定時制高校に通って半年過ぎた 10 月のある日、中学校へ行くと、部活顧問の先生から、Y が捕まったということを聞いた。その 2、3 日後、三

男と入れ違いに1年に進学してきていた四男に“兄貴はどうしている”と尋ねると、“鑑別所にいる”との返事が返ってきた。そして、母親から連絡が入り、傷害事件を引き起こして鑑別所に入っていることが判明した。保護観察処分になるだろうと言うと、先生に観て頂けないでしょうか、と言う。勿論そうならば引き受けるよ、と答えると、どうしたら、そうしてもらえますか、と言うので、観察所でそのように言いなさい、と言うと、言ってもいいのですか、と言うので、かまわないですよ、と答えた。そうこうする内に、観察所の観察官から電話がかかってきた。早大OBで保護司稲門会のメンバーでもあるN観察官は、“先生のお耳にはすでに入っていることでしょうが、Y君のことです。先生にはすでに3人もの対象者を持って頂いていて、区内でも一番多くの対象者を扱って頂いていていのですが、Y君はやはり先生に持って頂くのがベストだと思いますので”と言うことであった。私も“行き掛かり上そのつもりでおりましたから”とお答えすると、彼女も笑いながら、“では、よろしく願いいたします。”と言うことで、Yの保護観察が始まることとなった。

初回面接には、本人と母親がやって来た。Yはニコニコしながら“お願いします”というので、私も怖い顔もできず、“お前とこういう形で会うのは一番厭だったんだぞ”と言うと悪びれる様子もなく“すみません”と言う。一通り話した上で、母親にZ宅を往訪することを告げた。事件の内容は、赤羽駅前のマックで仲間10人と食事をしていたところ、同じく5、6人で食事をしていた高校生のグループが自分達をみて笑っていたので、彼等が店を出るのを追って、取り囲んで殴ったという。逮捕されたのは2人だけだったという、まことにお粗末な話であった。

この時、中一に進学してきていた四男Xは、中学校の先生方によると、上3人に比べて一番仕上がり方が早い、というのであった。つまり、同学年の生徒達に対しての顔の効かせ方、授業中の態度の悪さなど目に余るものがあり、しかも人の顔色を見るのが巧みで組しやすい相手に対しては飲んでかかるし、さらに、自分は手を出さずに手下の仲間を使っていじめをするという狡猾なところが、上三人とは違うというのである。

私は、この家族と対決する今がチャンスだと思ったのである。幸いYは、

中学校三年間の部活動を通じて、私の言うことは素直に聞く態度は出来ていたし、母親もまた私を信頼してくれていたからである。父親という人は表に出てくることはないが、口数は少ないが家の中では絶対的な力を持っていて、子供たちに対しては言葉ではなく拳で従わせているということを耳にしていた。現業の職人の世界ではありがちな人間関係の持ち方ではあるが、子供たちがそうした生き方を履き違えたままに生きていける、と思いつ込んでいたら彼等自身にとっても不幸なことであり、また学校は大迷惑なことであるし、事実、彼等兄弟に悩まされ続けてきているのである。長男からずっと見てきたベテランの女性教員によれば、親は、やられたらやり返せ、と教えてきたと言うのである。

やられたらやり返せは、やられる前にやってしまう、に簡単に転化している。もし、この論理を本当に子供たちに植え付けているのだとすれば、由々しきことである。次々に入学してきては、学校を手こずらせるこの家族に対して、これもベテランのある先生は、結局この学校もこの町も、ずっとあの家族に振り回され続けられるんですよ、と吐き出すように言ったことがある。それは、長男が二十歳で結婚して、すぐに子供が生まれ、それも男の子だったという噂が伝えられた時のことであつた。

両親、とりわけ父親と直接会って、彼等が世間から言われていることの真意、そして、何よりも彼等の本意を聞きたいと思ったのである。もしこの両親が、世間から言われているように本気でそのような考えでいるならば、Yの立ち直り、つまり更生は難しい、というよりは不可能だからである。そして、ある日の夕方、私はZ家を訪ねていったのである。狭い門の横の塀の上に、子供たちの運動靴がずらりとたくさん洗って干してあるのが印象的であつた。長男と次男は留守であつたが、家族がみんなで迎えてくれた。長身で男前の父親は鉄拳制裁の主にはとても思えない穏やかな感じの良い男であつた。

お茶を頂き、保護観察の説明を2, 3した上で、Yの指導を進める為に、一つ確認したいことがある、と私は切り出した。例の、”やられたらやり返せ“のことである。本当にそのように子供たちに言っているのか、と正してみた。すると母親が、確かに子供が小さかった時には、そのように言ったことはあ

る。何故なら、子供が泣かされたままにいるのは情けないと思ったからなので、今は、そのようなことは言っていない、と言うのである。自分から先に手を出すのではない、今は厳しく言っている、と言うのである。

私は、一応納得して、Yに関しては、社会的なルール違反をしないように極力注意をするように、次に事件を起こすと、今度は施設送りを覚悟してほしい、私も努力をするから、なによりも家庭で彼を注意深く見守ってほしい、と告げた。両親は恐縮して、よろしくお願いします、と深く頭を下げた。そして、今後とも、お互いに連絡を蜜に取り合うことを確認したのである。

その後、Yは学校に戻ったが、午前中いっぱい寝ているような生活が続いていた。時々寝過ごして往訪が遅れたり、来ないので電話をすると、寝ぼけ声で今から行きます、と言って慌てて来ることもあったが、往訪を避けたり、面接を嫌がるようなことはなかった。しかし、翌年の3月、いきなり学校を辞めました、と言ってきた。鑑別所に入っていた間の欠席が響いて、二年に進学できないのが分かったから、というのが理由であった。相談ぐらいてくれてもよかったのではなかったかと言うと、これを機に、もともと成りたかった格闘家への道に進みたい、というのであった。親は認めてくれたが、条件は働きながらでなら、ということなので、働きます、と潔かったのだ、まずは見守ることとした。

やがて、長兄の友人の紹介で空き缶などの回収業に就いた。朝が早く、5時起きして、6時には近所の集合場所で車に拾ってもらい職場に行く、という毎日が始まった。夜遅くまで遊びまわることには出来ても、朝は苦手のはずだったYがどれほど続くだろうかと危惧していたが、なんと、実に真面目に働くのには驚かされた。中学時代には、好きなはずのサッカーの練習でさえむら気で、根気のいる基礎練習などは乗り気でなかったり、興味のあることはまだしも、根気がなく、我慢強さに欠ける性格と思われていたYが、少々の体の不調はあっても休むことなく、実によく働くのである。その上、ある時、今の仕事はバイトのはずだが将来何に成りたいか、と尋ねると、ゴミ屋になりますと言うのである。彼は廃品の回収業をそう呼んでいたのであるが、聞いた私のほうが面食らう思いであった。廃品回収車の助手というのは、彼の言葉によれば、助手席に座っているのではなく、荷台に上乗りして、

回収場所から場所への移動の際は車の先回りをして走っているというのである。しかも、暑さ寒さに関わらず、雨のときも荷台に乗ったままの移動であるという。本人の性格に男気のある面があるのは知ってはいたが、ここまできちんと仕事をやるとは思いもしなかった。さすがは職人の子と感心もした。一生懸命の働きが認められたのであろう、半年が過ぎたころ、正社員の席が一つ空きそうなので、空いたら入るかと言われていると、嬉しそうに告げてきた。このバイトの合間にも、彼の目指す格闘技であるキックボクシングのジム通いは続いていて、筋力トレーニングは自主的にかなり熱心にやっていた。

丁度その正社員の話があったしばらくしたある日、右の大腿部と左の上腕、そして顔面にもかなりのダメージを受けて、体を引きずるようにして面接にやって来た。聞くと、数日前に、ジムで格上の大人の先輩とスパーリングやって、ぼこぼこにされたとのことだそうであった。勿論、ゴミ屋は休業である。やがて体調が回復してくると、友人の父親が経営している建築業でコンクリートパネルの据付の仕事に誘われたのでいきます、と報告してきた。相当にきつい力仕事で、すぐには出来ないだろうと言われて行ったが、初日から100キロ近いパネルを一人で持ち上げて驚かれたと胸を張って報告に来た。しかし、ここは1ヶ月もたたずに、上司に意地の悪い人がいて頭にきたので辞めました、と言ってきた。引越しのバイトをやったりしていたが、どれも定期的な仕事ではないので、3ヶ月継続して仕事をしていないと保護観察の解除が難しいと告げると、自分に合った仕事がありました、と言って報告に来たのが、解体屋の仕事であった。確かにこの仕事は性に合っていたらしく継続し、また、時に問題がなかった訳ではなかったがその都度母親と互いに連絡も取れていたし、暴力沙汰とか他人に迷惑をかけることもなかったので、1年4ヶ月の後、昨年3月末に良好解除とした。

このYの保護観察を通じて、少なくとも私は、学校の、そして町の癌のように言われてきたZ一家と、きちんと意思疎通をはかれるようになったし、Z家にとっても信頼できる"先生"を得たことになったわけである。母親もまた次第に変わっていき、小学校のPTA役員も買って出るようになり、学校長からも賞賛されるほどの働きをするまでに変身してきているのである。私

のZ家との対決は成功したといってもよいと思われる。Yとの最終面接をZ家で両親と本人と共に行った後、Yが、弟の四男Xを呼びましょうか、とニコニコしながら言うので、呼んでもらった。家の中でのXは学校での肩で風を切るような素振りとはまったくなく、両親、特に父親の前では、借りてきた猫、という言葉がぴったりするほど小さくなっていて、私が中学校で本当の番を張りたいのなら、弱者をいじめるな、授業を邪魔するようなことをして先生を困らせるな、もし、そういう仲間がいたら、X、お前が止めさせるぐらいでなければだめだ、そうでなければ本当の頭とは言えないのだ、と話した。最後にどの高校に行きたいのか、と尋ねると、この学区の上位高校の名を上げたので母親はびっくり。そこで私は、そうであるならばなおのこと、親の言う事は聞けなくても、学校の先生言う事は聞け、と言うと、母親もケラケラと笑い出し、父親もニコニコと聞いていた。

おわりに

さて私は、"地の塩"には到底成り得ないが、Yの保護観察を通じてZ家に影響力を持った者としては"地回り"のような存在なのかもしれない。四男のXが2年生になりたての頃であったと思うが、私が保健室で養護の先生と話していると、Xが仲間を引き連れて戸をガラッと開けて入ってきて体操着に着替えるとそそくさと出て行こうしたので、"X 待て"、と呼び止めた。すると怪訝そうな顔で、"なんですか"と言うので、"お前、部屋を出るときには先生に何か言う事がないか"と言うと、"失礼しました"と言って頭を下げて出て行った。

くっついて来ていた子分格の生徒が慌てて戸を開けて出て行った。養護の先生はおかしそうに、あの三下君達はかなりびっくりしていたみたいですよ、Xにあんなにはっきり物を言う人を初めて見たのではないかと思いますよ、と笑っていた。

実際、Yはこの地域の問題児たちににらみを効かせているだけではなく、区内は勿論のこと、隣接する荒川区や足立区にまでかなり名前は知られた存在ではあったのである。地域の悪といわれる少年達も彼を恐れ、また頼りに

してもいたのである。

私は、元大学教授、元 JFA 理事、元北区サッカー協会会長ではなく、Z 家の Y の保護司であることのほうが、問題少年達には、はるかに強いインパクトを与えているようである。

私の保護司としての年限は、なお数年残っている。地回りから、多少なりとも地の塩に近付けるように、慣性疲労がかなり進んできた老骨を鞭打ち、もうしばらく働いてみることにしよう。

追記

もともと仕上がり早いと懸念されていた X は、学校から推薦を受けて臨んだ、都の次世代を背負うヤングアスリートの最終選考をもクリアーして 20 名のメンバーに選出され、先生方の指示もよく通るようになり、問題児の列から抜け出ている。特に、運動会ではリーダーを立派につとめ、その実力を遺憾なく示してくれた。野球部ではキャプテンとして部活を引き締めている。授業にも真面目に取り組み、彼の変身が学校の変化にも結びつつある状況が生まれている。